

平成 23 年度研究成果情報

課題名：アゲマキ母貝団地の効果的造成方法の検討

[背景・ねらい]

アゲマキは、かつては佐賀県有明海の泥干潟で普通に見られる二枚貝として、漁業生産のうえでも極めて重要な位置を占めていたが、平成 2～3 年にかけて激減し、平成 4 年以降は 20 年近くほとんど漁獲がない状態が続いている。

このため、種苗生産・放流技術を開発し、アゲマキ母貝団地の効果的な造成方法を確立することにより、資源の再生産力回復を図る。

[成果]

- (1) 平成 21 年度以降の 3 ヶ年で、放流用の稚貝（殻長約 8mm）250 万個を生産し、これらを佐賀県沿岸の 6 地区に放流した。放流後の稚貝は 6 地区中 3 地区で比較的良好に生残しており、このうちの 1 地区については平成 23 年度の調査において漁獲サイズ（70mm）を超え、順調に成長していることを確認した（図 1、2）。



図 1 放流 2 年 4 ヶ月後のアゲマキ

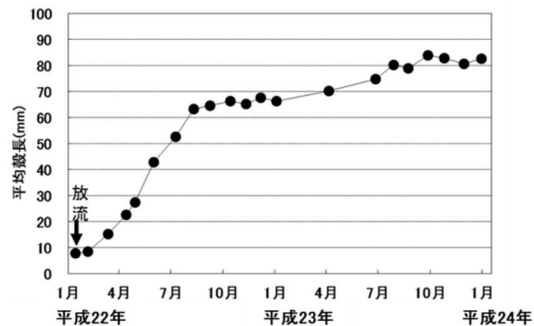


図 2 放流後の成長（太良町地先放流群）

- (2) 稚貝の放流に適した条件として、地盤高 2.0～4.0 m 程度、底質の含水率が 60 % 以下等が明らかになった。
- (3) 一部の成貝を実験室に持ち帰り飼育したところ、放卵、放精が確認されたことから、放流地のアゲマキが母貝集団として機能している可能性が示唆された。

[課題・問題点]

- 今後、広域的に母貝団地の造成を図っていくうえでは、放流適地としての条件のさらなる絞り込みを行い、場合によっては放流地の底質改善手法についても検討していく必要がある。

[今後の対応]

- 放流地の環境条件に重点を置いた現場調査の継続、効率的な底質改善手法の検討等。

[その他]

研究期間：平成 21～23 年

研究担当者：資源研究担当 津城 啓子、佃 政則